



# 古道が紡ぐ物語



## 壬申の乱の足跡を訪ねて②東国進発

～大海人皇子、吉野（奈良県吉野町）を出発し不破（岐阜県関ヶ原町）に入る～

天智天皇の弟・大海人皇子と、天智天皇の子・大友皇子とが皇位継承をかけて争った「壬申の乱」を描きます。今回は、天智天皇が崩御した翌年の672年5月、「天智天皇の陵を造るとの名目で大友皇子を中心とする近江朝廷が美濃・尾張の兵を徴発している」との報をきっかけに、大海人皇子が吉野を脱出し、自身の勢力圏である美濃国に向かう緊張の東下りを描きます。

### 大海人皇子、美濃へ向けて吉野を発つ

#### ■緊迫する情勢

672年5月、大海人皇子のもとに「近江朝廷が美濃・尾張で兵を徴発している」、「朝廷が菟道橋の橋守に命じ、大海人皇子の舎人に自家の食糧輸送を禁じている」との報が入った。事態が緊迫する中、皇子は以下のように決意を述べた。

「皇太弟の座を譲り遁世したのは、天命を全うせんがためである。しかるに今、不可避の禍を受けんとする、どうして黙って亡ぼされようか」

6月22日、皇子は3人の部下を呼び、「美濃国安八磨郡（岐阜県安八郡）の湯沐令（皇子の領地である湯沐邑を管理する役人）に機密を打ち明け、兵の徴発と、軍勢を発し不破道を塞ぐ」ことを命じた。

また、皇子は東国進発に先立ち、部下を飛鳥留守司の高坂王に遣わし、駅鈴を求めさせた。同時に、近江に留まっている皇子の子である高市皇子・大津皇子に人を遣わせ、伊勢で合流するよう伝えるべきことを命じた。

駅鈴は、官人の公務出張を助けるため主要街道に置かれた駅家の駅子・駅馬の使用許可証であり、いわば通行手形でもある。結局高坂王は駅鈴を渡さなかったため、使いの者は戻って皇子にその旨を伝えた。しかし高坂王は、皇子一行に追っ手を差し向けることはなく、また近江朝廷にそのことを伝えることもなかった。近江朝廷はこの時点では、これが乱の端緒であることにまったく気づい

ていなかった。

#### ■吉野宮脱出、菟田の吾城に到着

6月24日、大海人皇子は東国に向けて吉野を進発する。妻の鷗野讃良皇女、子の草壁皇子・忍壁皇子と、その他舎人ら20人余り、女孺10人余りが随行した。騎馬は用意できず徒歩での出立となったが、たまたま乗馬した舎人に出会って皇子はそれに乗馬し、皇女は輿に乗って従った。

一行は吉野宮から矢治峠を越え津振川（津風呂川、吉野町津風呂）に至り、ここで乗馬が届いた。一行は津風呂川に沿って北上したと考えられるが、彼らが歩んだであろう道は、ダム建設でできた津風呂湖の底に沈んでいる。

関戸峠を越え、天皇の遊獵地として知られる菟田の吾城（宇陀市）に着いた。当地は弥生時代、飛鳥時代、中・近世の3時期にわたる遺構を留める中之庄遺跡があり、現在は「阿騎野・人麻呂公園」として整備されている。命名の由来となった柿本人麻呂像には、この地で詠んだとされる彼の代表的な歌「東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」が刻まれている。



ダム建設でできた津風呂湖（左）



柿本人麻呂像の立つ阿騎野・人麻呂公園（右）

## ■甘羅村を過ぎ、積殖山口で高市皇子と合流

甘羅村（宇陀市神楽岡付近か）を過ぎた時、獵師 20 人余りを見出し、これを一行に加えた。さらに湯沐邑から米を運ぶ伊勢国の馬 50 匹と菟田の屯倉のあたりで出逢い、米を捨てさせ、徒歩の者を乗せさせた、と『日本書紀』にはある。

湯沐邑は、前述のように皇子の領地であり、偶然とは思えない。騎馬を輸送するという真の目的を隠すため、米を積んで偽装したのだろうか。

大野（宇陀市室生大野）に至って日が暮れ、一行は人家の籬を壊して松明として闇の中を進み、夜半に隠郡（三重県名張市）に到着した。ここで隠の駅家を焼き、皇子が東国へ出立すると村中に触れて人夫を募ったが、誰も集まらなかったと『日本書紀』は記している。それも当然のことで、隣の伊賀国は大友皇子の母・伊賀采女宅子娘の出身地であり、敵勢力圏内を強行突破した形になる。

横河（名張川と宇陀川との合流地点か）に着こうとするとき、黒雲が天を覆った。これを怪しんだ皇子は燈を灯し式（古いに用いる筮竹）を取って占って曰く、「これは天下二分の前兆である。しかし最後には私が天下を取るだろう」と。

一行は、夜を徹した強行軍で伊賀国に急行し、伊賀の駅家を焼いた。25 日の明け方、荻萩野に到着。しばしの休息と食事をとったのち、すぐに積殖山口（伊賀市柘植町）で鹿深を越えてきた高市皇子と合流し、その後大山（鈴鹿山脈）を越えて伊勢の鈴鹿に着いた。この時、伊勢国司らが皇子一行を出迎えており、既に伊勢の主要豪族を掌握していたことがわかる。

## ■東国豪族を味方につけ、満を持して不破に入る

一行は途中豪雨に見舞われ、三重郡家（三重県三重郡）で小休憩を挟む。26 日の朝を迹太川の辺（旧朝明郡・現四日市市）で迎えた一行は、この地から天照大神（=昇る朝日）を遥拝した。

ここで、美濃国で起こした 3,000 の兵が首尾よく不破の道を塞いだとの報告が寄せられ、皇子はその手柄をほめた。そして高市皇子に指揮権を任

せて不破へと進め、自身は桑名郡家に入った。

この日、事態を察知した近江朝廷が東国に急使を差し向けたが、時既に遅く、不破の道を閉塞していた皇子の兵によって捕縛されている。封鎖が 1 日でも遅れていれば、東国には皇子追討命令が出され、計画は頓挫していたことだろう。

『書記』は反乱者である大海人皇子の行動を正当化するため、乱の勃発を一貫して偶発的な出来事として描いている。しかし、馬などの補給物資の到着や味方との合流等、あらゆるタイミングが整っていることは偶然とは思えず、実際には極めて綿密に計画された出来事であったと考えられる。

27 日、大海人皇子は高市皇子からの要請を受け、前線本部のある不破に入った。尾張国司が 2 万の軍勢を率いて皇子軍に帰属し、ここに近江朝廷軍と対決の時を迎えたのである。（次号に続く）

（太田宜志）

### 大海人皇子一行 不破に至る道のり



### 壬申の乱 関係年表

とき	主な出来事
672 年 5 月	大海人皇子、尾張・美濃の徴兵を知る
6 月 22 日	皇子、3 人の舎人を美濃に先遣
6 月 24 日	皇子、高坂王に駅鈴を求めると却下される。皇子一行、吉野宮を進発
6 月 25 日	積殖の山口で高市皇子と合流
6 月 26 日	皇子一行、迹太川の辺で天照大神を遥拝。先遣の舎人が不破道を閉塞したとの報を受ける。桑名郡家に入る
6 月 27 日	皇子、不破郡家に入る。尾張国司、2 万の軍勢を率いて帰属